

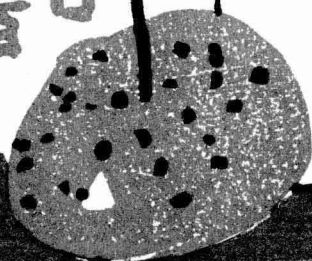
伸子



仲子

芳林苑
大

中條百
合子著



昭和三年三月一日印刷
昭和三年三月三日發行

發 兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目六番地

改 造 社

振替口座東京八四〇
電話芝(43) 四三二一
番番番番番番番番番番

著 者 中 條 百 合 子
發 行 者 山 本 美
印 刷 者 植 田 庄 助
東京市芝區愛宕町二丁目十四番地

仲 子
定價貳圓五拾錢

常盤印刷株式會社印刷

明治文學館 近代文學全集 昭和44年9月

序

この小説は、大正十三年の九月から十五年の九月までの間に、一部分づつ改造に掲載されたものだ。

書き始めてから、終るまでの間に足掛三年経つて居る。其故、擱筆當時に見てさへも、最初の部分は、舊作の感があつた。其後、全體を一纏めにする爲にひどく時間をかけたし、印刷にかゝつてからも手間どり、今は事實上舊作になつた。然し、この作品は自分の生活と密接な關係のあつたものだし、作の上に年輪のやうに發育の痕跡が現れて居る點、自分は愛を感じて居る。

昭和二年十一月二十三日

作 者

—

伸子は兩手を後に廻し、半分明け放した窓枠に倚りかゝり乍ら室内の光景を眺めて居た。

部屋の中央に長方形の大卓子があつた。枝形燈架の明りが、其卓子の上に散らかつて居る書類――

タイプライタアの紫インクがぼやけた亂暴な厚い綴込、隅を止めたピンがキラ／＼光る何かの覚え書――の雜然とした堆積と、其等を挟んで相對し熱心に読み合はせをして居る二人の男とをくつきり照して、鼠色の絨氈の上へ落ちて居る。

部屋中を輝かす灯が單調である通り、二人の男の仕事も單調で詰らなかつた。ホームスパンの服を着た、淺黒い膚せた男が左手に綴こみを持ち、眼を配り、頁をめくり、どん／＼桁の多い數字を讀みあげて行く。向ひ合つて、伸子の父の佐々が椅子に淺くかけ、青鉛筆を持つて油斷なく數字をチエツクして居た。彼は品のよい縞で變り襟のついた奥煙着を着けて居た。くつろいだ装にも似合

はず、彼はもう卅分以上その忙しい、機械的な仕事に没頭して居るのであった。

傍觀して居る伸子には、仕事の内容も、今其をしなければならぬ必要も解つて居なかつた。彼女がおとなしく窓際に退いて眺めて居るのは、主として、子供のうちから父の多忙な時決して邪魔は出ないものと觀念して居る習慣によるのであつた。けれども、彼女は段々彼等の活動の調子に釣込まれて行つた。強くも弱くもならない平らかな聲が早口に

「二八七、二六〇。五九三〇三、四二七……」

勤勉な紡綫の唸りのやうだ。其につれ、佐々の青鉛筆は殆ど自動機敏の靈活さでさつさつ、さつさと、細かく几帳面に運動する。そこに自ら獨特のリズムが生じた。凝つと見守つて居ると、機械の規則正しい運轉が人の心に與へる、力強い確平とした、同時に精力的な亢奮に似たものを感じるのであつた。彼等は一息にふた綴大判の綴込片づけた。そして、少しのろ／＼と、三つめの薄い覚え書を讀み合せて仕舞ふと佐々は、如何にも重荷の下りた風で

「やあ、どうも御苦勞様でした」

と、頭を下げ椅子をすらした。

四邊には、一時に緊張の緩みが來た。伸子まで何となく吻つとし、俄に外界の騒音が自分の背後か

ら幅廣く押しよせて來るのを感じた。丁度晚餐後、人の出盛る最中だ。彼女等の居る五階の眞下に横たるブロード街からは、絶間なく流れる無數の人間の聲音、喋り聲、笑ひ聲等が溶け合ひ混り合ひ、とりとめのない雑音の濃い瓦斯體となつて昇つて來た。夜の空まで瀰漫する都會の巨大などよめきを貰いて、キロロロロロ……と自働車の警笛が聞えた。燈柱の下で夕刊を呼び賣する子供の「バイバア、バイバア」と云ふ甲高い聲が途切れ途切れ聞えて來る。——ホームスパンの男は、手早く書類をまとめて自分の黄色い手下げ靴に仕舞つた。そして、二言三言佐々と話し、伸子に遠くから挨拶すると、速しく氣取つて出て行つた。佐々は戸口まで其男を見送つた。戻つて來ると、彼は美味さうに葉巻の煙を吹いた。

「さて——そろ／＼出かけますかな」

伸子は窓際を離れ、傍の長椅子に來てかけ乍ら、訊いた。

「本當にいらつしやる積り？」

「どうして？ お前も行くんだらう？ さう返事をしてありますよ」

「私——やめたいわ」

「何故？」

「草臥れて居るの。——それに……餘り面白くも無さうぢやないの」

「ふむ……」

佐々は、暫く黙つて自分の吐く煙を眺めて居たが、聽て徐ろに云つた。

「着物なんぞはそのまゝで結構なんだからおいで。——行けば何かしら行つた丈のことはあるものだ。それに儂の居るうち出来る丈人も知つて置かないと、いざといふ時一人で困るよ」

今夜、彼女は父と二人、日本人の學生俱樂部で催される或集り、茶話會のやうなものに招かれて居た。最近故國から來た某文學博士を中心として打ち解けた集りをするといふ案内を貰つて居たのだが、伸子は一向好奇心が起らなかつた。彼女自身も紐育には新來の旅客であつた。彼女、午後獨りで勝手の不確かな下街に買物に出かけ神經を疲らせて歸つた。夜まで行儀を守つて人なかに居なければならぬのは、彼女に少しうんざりなのであつた。けれども健康で活氣がある佐々は、伸子の引込思案を多くの場合うけつけなかつた。彼は、六十歳に近い老人と思はれない活潑さで、いつも伸子を引き廻した。それには、自分が滯留して居るうちに、地理も覚えさせ、交友も拵へて置いてやらうといふ心遣が潜んで居るのは明かであつた。彼は會社の用事で、僅か三箇月ばかり、此都市に來た。彼が歸つて仕舞へば伸子は獨りで居遺る豫定であつた。彼女は旅行の間、大抵いやでも父が行く處へは

蹣跚して歩いた。市役所から、或大銀行の金網の裡で、人間が金貨の山に埋り血の氣のない指で金勘定をして居る、空氣の流通のわるい暑い部屋の中まで。土地不案内な、此といふ定つた目的も持たない

伸子は、又、さうでもしなければ一日が永く、捨てられた石のやうに退屈したに違ひない。――

今も彼女は確に行きたくはなかつた。けれども、父が出た後、ぼつとり獨りで旅舎の部屋に十二時頃まで閉ぢ籠ることを考へると、それも餘りぞつとした役廻りとも思へない。

伸子が足をふりふり愚圖々々して居る間に、佐々は其にかまはず活動家らしい足どりで寢室に行つた。間もなく、開け放した扉から、水のぼしや／＼いふ音、髮刷毛を置く軽い乾いた音などが響いて來た。窓からは、宵つばりな都會の眠氣知らずなざわめきと、向ひ側の建物の屋根の頂に廻つて居る廣告電光飾の氣ぜわしい明滅。下界の燈火を反射して、ぼうつと潤ひを帯びた黒い夜空の一部が見える。

伸子の胸にいきなり

「おいてきぼりにされては大變だ!」

と云ふ、子供らしい切ない思ひがこみ上げて來た。

彼女は、いそいで椅子を立ち、父の後を追つた。佐々は、もう髪の手入れもすみ、部屋の眞中に立

つて上着に片手を通してかけて居るところであつた。其を見ると彼女は慌てゝ云つた。

「すまないけれど一寸待つて下さない？ 私、矢張り行くわ」

伸子は早足に鏡の前に行つた。

佐々は、時計を見た。

「もう餘りゆつくりは出来ないよ」

「すぐよ、五分！」

伸子は、迅速に髪をなほし、小さなまろい茶色の帽子をかぶつた。

一一

丁目が殖えるにつれ、人通りが減り、街が寂れて來た。

父娘は、陰氣に目隠しの下りた大きな飾窓について角を左へ曲つた。表通から入ると俄に暗く、

緩く爪先下りになつた鋪道の足許さへよくは見えないやうであつた。行手の大通り一つ隔てた彼方がハドソン川で、時々鋭い夜の河風が吹きぬけた。川沿公園の葉のない樹木の間に冷たい蒼白さで瓦斯燈がぼんやり灯つて居るのが見える。

伸子は、寒さと淋しい處へ紛れ込んだ氣味惡さでと異様な緊張を感じた。彼女は、我知らず強く父親の腕にすがりついた。

「——まるで暗いのね。——見當がおつきになつて？」

佐々は、靴の踵の音をさせて歩き乍ら、絶えず右側の家並に注意を拂ひ、幾分平生と違ふ壓へつけた音聲で答へた。

「もう少し先だらう。——然し斯うどれもこれも同じ形の家ばかりでは參るな。もつと街燈でもふやせばいゝのに……」

全く、左右には低い鐵柵と三四段の上り口を持つた狭い家の入口が、どれも此も同じ型で幾十となく並んで居た。鋪道のまばらな街燈の光は、一寸奥に引込んだ其等の質素な戸口まで届かない。彼等は、段々佗しく感じ乍ら、殆ど一軒ごとに薄暗い家の入口を覗いて進んだ。大抵いやになつた時分、彼等の前に、一つ明るく灯かけの洩れる弓形窓が現れた。窓帷の隙から、内部にちらつく男の立姿や

文句の判らない話し聲が聞えて来る。――

伸子は、父の腕を引いた。

「此處よ！」

佐々は、外廻りを一通り眺め、入口の段を昇つた。呼鈴を押した。短い、餘韻のない音が直ぐ、扉の彼方で鳴つた。伸子は、期待と好奇心を感じた。暗い横通りで變な不安に襲はれて来たところなので、彼女にはこの古くさい板硝子の嵌つた扉の一重彼方が何かの暖かさ樂しさを持つて居さうに思はれたのであつた。すぐ硝子に人影がさした。櫻扉は内側に案内滑らかに開いた。扉をあけた男は、彼等を見ると更に入口を廣くあけ、改つた口調で挨拶した。

「よく被來つて下さいました。――どうぞ……」

佐々は玄關の間に入ると直ぐ外套を脱ぎ始めた。伸子は自分の周圍を見廻した。右の壁際に鏡つきの高い帽子掛があつた。左側には、葡萄葉の厚肉浮彫のある腰架が置かれ、其前から二階へ登る緩い階段が見上げられる。奥に重い垂帳で人目を遮つた開け放しの室があつた。その廣間から男聲ばかりの、壓力が籠つた談笑が響いて來た。其邊一帶頑丈な茶色の檜の圓柱や鏡板が艶々灯の下で光つて居るのが、伸子に快適な感銘を與へた。彼女の感覺に新鮮な一種の匂ひがその邊に滲みついてゐ

た。家具の艶出し液のにほひ、煙草、羊毛ともう一つ何か乾いた皮製のものから立つやうな香が皆一つに溶け込んだ、男ばかりの住居らしい匂だ。

佐々の外套をたすけてぬがすと、扉をあけた男が云つた。

「——では此方へ、女の方も澤山来て居られますから……」

伸子は、軽く頭を下げる拍子に初めて其男の顔をはつきり見た。彼は白い低いカラアと黒いネクタイと黒い地味な少し手ずれた服を着て居た。陰氣な顔だが、圓みのある大きい顎が目についた。伸子は、階子を登り乍らは、

「安川さん、来て被居いますか」

と訊いた。

三十五六に見えるその男は、持ち前と見える低い調子で答へた。

「来て居られます」

二階へ登り切ると、一つの部屋の戸が半分開いて居て中から女の喋聲がした。彼は

「安川さん」

と聲をかけた。

「佐々さんが見えました」

中の話聲がびたりと鎮つた。

「まあ！ さうですか」

聲と共にやゝ前廻みな大股で、闕の上に安川の姿が現れた。伸子を案内した男は階下へ去つた。安川冬子は、伸子がある専門學校に僅の間籍を置いて居た時、上級の學生であつた。彼女は勤勉な學業の優れた生徒として誰にでも知られて居た。伸子は、一二度口を利いた位の間であつたが、此處で兎に角海の彼方からの友達と云へるのは彼女ざりであつた。安川は、一年許前から、C大學で教育心理學を専攻して居るのであつた。

安川は、珍しさうにじろく伸子を見た。

「噂はきいて居たけれど、私は一向外へ出ないから、ちつとも知らなかつたわ。よくいらしつてね。

——いつ此方へ着いて？」

「三週間ばかり前」

安川は、學校時代と些も變らない、その變らなさに伸子が驚いたほど同じてきばきした口調で訊いた。

「お父様と御一緒だつて？」

「ええ。腰巾着」

伸子は、自分がこの女性達の前でまるで年少者扱ひなのを感じた。

「今夜も下に來て居るわ」

「さう。——いゝわね。今どこ？ お宿は」

「×××ホテル」

「あゝ、私あすこならいつだつたか行つたことがありますよ。——皆さんに御紹介しませうね、こちら高崎さん——高師をおでになつて家政學をやつて被居る。この方は名取さん……音楽が御専門——」

伸子は一人々々に向つて克明に頭を下げた。

一通りの挨拶、短い應答が終ると、伸子は失望といふか、意外さといふか、ぼんやり寥しい心持を感じた。居合せる人の中には一目で何處か好きになれるといふやうな人が一人も居なかつた。彼女等は、それ／＼専門もちがひ容貌も違つては居るのだが、誰でもが確りものらしいところ、物質にも精神にも多忙で絶えず何かに追ひ立てられて居るといふ餘裕のない感じ。其等は、うるほひない身なりとともに、例外的に持ち前であつた。伸子は、傍の椅子の上に外套を脱いだ。